

敬愛大学 宮城ボランティア 2018 活動報告書

3つの「つ」～ つたえる、つながる、つづける



地域連携センター

(表紙)

宮城県名取市の閑上中学校で津波の犠牲になった生徒さん 14 名の名前が刻まれた慰霊碑。今春まで「閑上の記憶」敷地内にありましたが、2018 年 4 月に開校した義務教育学校「名取市立閑上小中学校」の敷地に移設され、本学学生たちも立ち寄らせていただきました。犠牲になったこどもたちが寒がらないように、一人ひとりの手で刻まれた名前をなぞりながら、手の温もりも移させていただきました。

表紙の上下2色の帯は、本学のスクールカラーである「敬愛レッド」「敬愛ブルー」です。



川内村の猪狩副村長による講話



猪狩副村長、秋元教育長と一緒に



安部克己さんを囲んで



安部さんから小高のいままでとこれからを伺う



7年前から時間の止まった双葉町のコンビニ



帰還困難区域の厳しい現実



大川小学校で慰霊の鐘をつき、祈りを捧げる



児童の声が消えた学校で鈴木典行さんと



女川で田村孝行さん・弘子さん夫妻の講話



健太さんの遺影を前に、思い新たに



「閑上の記憶」にて



丹野祐子さんの親馬鹿の話、心に染みます



閑上小中学校に移設された慰霊碑にて



3大学揃っての合同ボランティア学習会



宮城、千葉、福岡をつなぐ学びあいの時間



価値ある時間を共有したディスカッション

敬愛大学 宮城ボランティア 2018 活動報告書

3つの「つ」 ～ つたえる、つながる、つづける

Page 1	巻頭言
2	訪問地、行程
4	総括 『3つの「つ」～つたえる、つながる、つづける』の意味
6	参加学生のレポート
38	引率教員のレポート
40	3大学合同研修・交流プログラム
42	参加者名簿
43	編集後記

巻頭言

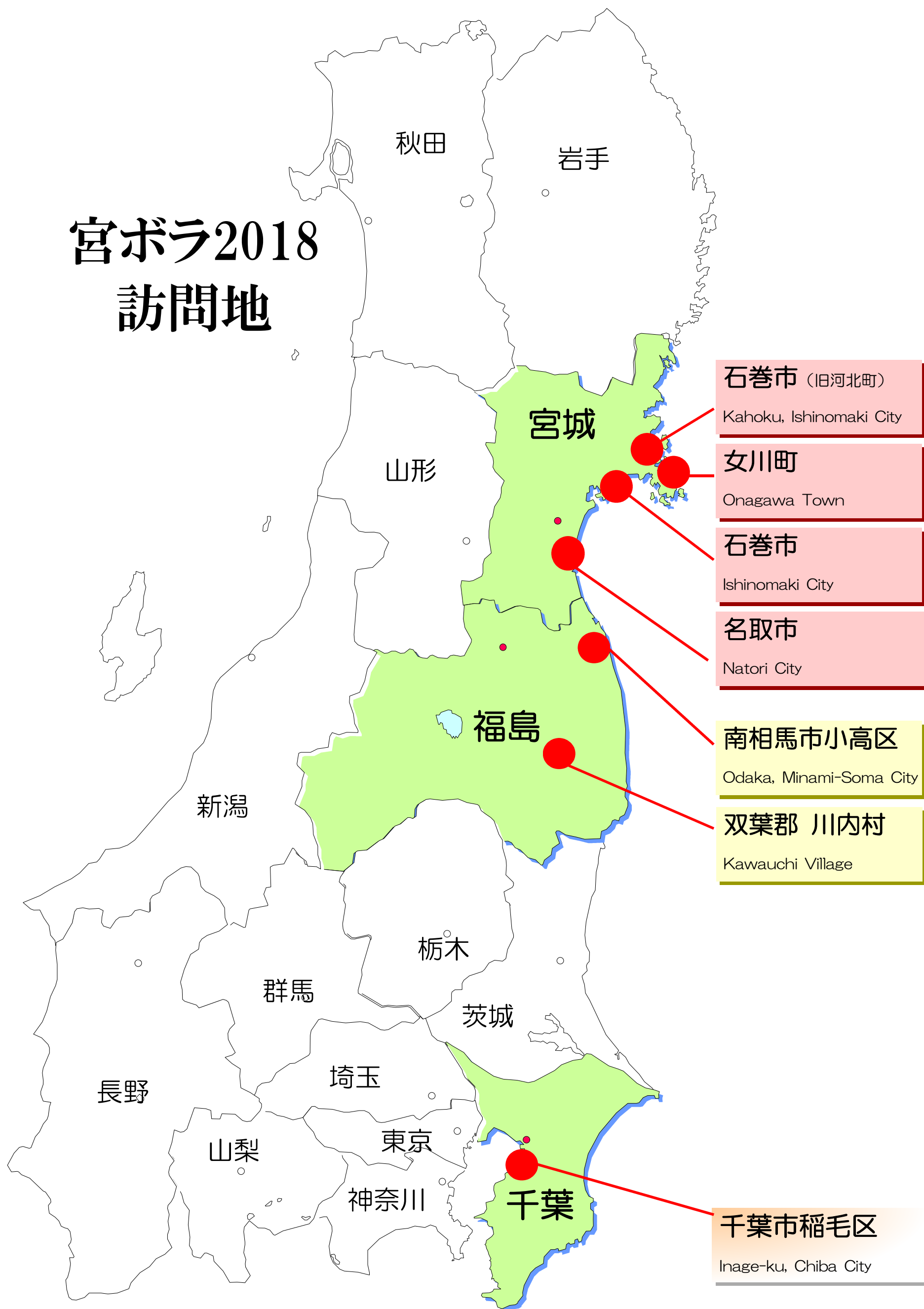
今年の宮城ボランティアの出発にあたり、参加する学生たちへのメッセージとして「三現主義」という言葉にふれました。物事の問題解決の姿勢として、「現場に出向くこと」「現物に直接触れること」「現実をとらえること」を重視する考え方のことです。ビジネスの世界ではよく使われる言葉ですが、本学の宮城ボランティアでも大切な姿勢ではないかと考え、参加学生諸君にお話した次第です。

さて「想定外」という言葉が、もはや当たり前になってしまったような昨今、地震や集中豪雨などの自然災害は、残念ながら後を絶ちません。西郷南洲の遺訓の通り、人間は天地自然によって生み出され、生かされていることをつくづく感じさせられます。

本学が毎年夏季期間に実施している「宮城ボランティア」は 8 回目を迎え、今年は 32 名の学生が参加しました。昨年に続き敬愛学園高校の生徒1名も参加され、この活動が学園内の取り組みとして認知されつつあるようで、嬉しく思います。報告書の発行に当たり、第1回からお力添えをいただいている尚絅学院大学の皆様をはじめ、多くの協力者の方々に改めて感謝申し上げます。

学長 三幣 利夫

宮ボラ2018 訪問地



宮ボラ 2018 の行程

【第1日目】 9月1日(土)

- 6:45 稲毛駅(イオン稲毛店前) 集合
- 7:15 稲毛駅前を少々遅れて出発し、千葉北ICから東関東道、圏央道、常磐道を経て北上。
途中酒々井PA、中郷SAにて休憩。
- 12:10 「いわなの郷 幻魚亭」着、昼食。
- 13:00 「福島県川内村役場」を訪問、遠藤雄幸村長に代わり、猪狩貢副村長から講話をいただく。
- 14:15 同所 発
途中常磐道を通らず国道6号線を北上、帰還困難区域に指定されているエリアを車窓から見学。
- 15:45 「双葉屋旅館」着、安部克己氏(南相馬市小高生涯学習センター所長)から講話をいただく。
- 18:30 ホテルルートイン名取岩沼インター 着
-

【第2日目】 9月2日(日)

- 10:00 震災遺構となった「石巻市立大川小学校跡」を訪問、鈴木典行さん(大川伝承の会共同代表)にお話を伺う。
- 12:00 「シーパルピア女川」着、各自昼食
- 13:15 女川町地域医療センター前の慰霊碑前で、田村孝行・弘美ご夫妻にお話を伺う。
- 16:00 「名取市日和山」着、日和山を視察した後、移転して間もない「閑上の記憶」で、西南学院大学からの参加者と合流、入れ替わりに丹野祐子さんからお話を伺う。
- 18:00 ホテルルートイン名取 着
-

【第3日目】 9月3日(月)

- 8:30 名取市立閑上小中学校 着、今春「閑上の記憶」敷地内から移設された、閑上中学校慰霊碑に献花、黙祷を捧げる。
- 10:30 尚絅学院大学 着。
3大学合同ボランティア学習会(講話、グループワーク)
長沼俊幸さん(元・愛島東部仮設団地自治会役員)からお話を伺う。その後、8グループに分かれ、昼食を挟んで「被災地・被災者に自分たちにできることは何か」をテーマにディスカッションを行った。
- 13:30 同所 発
常磐道、圏央道、東関東道を経て一路稲毛へ。
車内では希望者制で、感想や自分自身の得た学びを発表しあった。
- 19:45 稲毛駅(イオン稲毛店前) 着、解散。

『3つの「つ」 ～つたえる、つながる、つづける』の意味

団長 地域連携センター室長 藤森孝幸

地域連携センターの開設から2年目を迎えた平成30年9月、巷では「平成最後の・・・」という言葉が多用されるようになった。そういう意味では、今年の「宮ボラ」も平成最後の活動となった。だからではないだろうが、5月28・29日に募集説明会を開催したとき、参加者が60名を超えたのには驚かされた。「風化させない」取組であるにもかかわらず、学生の意欲が高まっていたことには、驚きと感謝の気持ちしかなかった。結果としては32名(うち1名は高校生)に参加者を絞り込み、今年の「宮ボラ」に出発したのである。



今年度の宮城ボランティアを企画するにあたっては、大変お粗末ながら地域連携センター内の人員配置の都合もあり、学生有志による企画リーダーを募る時間をとることができず、学生たちの自主性を考慮したプログラムにすることができなかったことを、お詫びしなくてはならない。それでも過去に参加経験がある学生たちが多数、個別に質問や相談に来てくれたことで、プログラムを組むことができた。さらに本学客員教授の北原文成先生が千葉敬愛高等学校の校長在職中に企画された福島ボランティアのご縁を、今回の1日目の企画に加えることができたのは光栄なことだと思っている。

さて今年のテーマを考えるにあたっては、第1回の宮ボラからお世話になっている尚絅学院大学の継続性のある取組を参考にさせていただいた。『3つの「つ」 ～つたえる、つながる、つづける』は、尚絅学院大学の復興支援活動のキーワードである。一緒に活動する場面もあることから、そのまま今年の「宮ボラ」のテーマにさせていただいた。キャンパスのある名取の街で、現在もボランティアステーションやボランティアチーム TASKI(樺)が中心となって取組を重ねてきた尚絅学院大学に敬意と感謝を表すると同時に、尚絅学院大学の学びや経験を、今回の2泊3日を通じて敬愛大学に持ち帰るべく、このテーマをそのまま使わせていただくこととした。

では私たち敬愛大学からの参加者は、どうこのテーマと向き合っていかなければならないのだろう。

私が直接「宮ボラ」の企画運営に関わるようになり、今年で3年目。過去2回の「宮ボラ」では、『見る、聴く、話す、そして繋がる』をテーマにしてきた。「話す」は「伝える」に言い換えることもできるだろう。今年は「続ける」がそれまでのテーマに加わった。つまり参加者一人ひとりが、どのように^{つた}え、^{つな}がり、^{つづ}けていくかを考えてもらおうと考えたのである。

現地で見聞きしたことをインスタグラムやツイッター等のSNSで発信する。この機会に知り合った敬愛大学生同士や他大学の学生たち、現地でお世話になった方々と連絡先を交換する。来年も「宮ボラ」に参加する。誰かにプレゼントを贈ったり大学祭等でなにかを販売したりするときに、宮城や福島の商品を選ぶ。友人や家族とのドライブで、今回の訪問地を再訪する……。まさに「可能性は∞」。出発前の説明会で、私は資料を通じてこのような姿勢で参加してごらんと助言をし、あとは学生たち一人ひとりに、「つたえる、つながる、つづける」の意味を考えてもらうことにした。

ある学生は、昼食のために立ち寄ったシーパルピア女川で、受け取った黄色のレシートについての発見を私に「つたえ」てくれた。買い物客にさりげなく防災や女川町のいまと未来を伝える「みまもりレシート」の取組 (<http://mimamori-receipt.jp/onagawa/>) は、防災のワンポイント・アドバイスだけでなく、町の観光地の紹介や未来を語るツールとして最近スタートしたものだが、短い昼食時間の慌ただしい中での気づきは、きっと「つたえる、つながる、つづける」の姿勢で大きくなっていくに違いない。

多くの皆様のお力添えで、今年の「宮ボラ」も無事終了した。まだ学内での報告会実施などやるべきことは残っているものの、地域連携センターでは学生たちの意見にも耳を傾けながら来年度の企画準備を始めようとしている。

帰りのバスの車内で、私は「宮ボラは、様々なボランティアの導入編。今回の経験を機に、様々なボランティア活動に挑戦してほしい。そのための協力は惜しまない」という話をした。今回の経験を通じて、参加した学生たち、また本報告書をお読みいただいた多くの学生・教職員が、未だゴールの見えない東日本大震災の被災地の現状に思いをはせ、また昨今続いている様々な自然災害への備えを考え直しながら、今回のテーマの「つたえる、つながる、つづける」の意味を考え続け、実践していくことを期待したい。

結びに、多くのご縁に改めて感謝と敬意を表したい。

今回の企画実現にあたり、特に記して感謝申し上げます。

- ◆ 佐々木真理様 (尚絅学院大学連携交流課長)
- ◆ 山口由美子様 (西南学院大学キリスト教活動支援課副課長)
- ◆ 遠藤雄幸様、猪狩貢様、秋元正様、遠藤清輝様 (福島県川内村)
- ◆ 横山祐二様、渡邊秀朗様 (株式会社あぶくま川内)
- ◆ 安部克己様 (南相馬市小高生涯学習センター所長、前南相馬市小高区長)
- ◆ 小林友子様 (双葉屋旅館)
- ◆ 鈴木典行様 (大川伝承の会共同代表、3.11 メモリアルネットワーク代表)
- ◆ 田村孝行様、田村弘子様 (七十七銀行女川支店被災者家族会)
- ◆ 丹野祐子様 (関上中学校遺族会・会長)
- ◆ 北原文成様 (敬愛大学客員教授)

宮城ボランティアに参加して

経済学部 1 年 猪又唯衣

今回、宮城ボランティアに初めて参加した。今年は、東京電力福島第一原子力発電所事故の影響で避難指示が出た、福島県の川内村と南相馬市、津波被害にあった宮城県の大川小学校、女川町、閑上地区を訪問した。

テレビや新聞を通じて、福島第一原子力発電所事故で避難指示が出たことや、津波で多くの方が亡くなったことは知っていた。しかし、被災地に訪れ直接話を聞くことで、どのような被害に遭い、どのような生活を送っているのかなど知らないことの方が多いと感じた。

とても印象に残っているのは、「閑上の記憶」で聞いた丹野祐子さんのお話だ。「津波の被害にあったことがないから、大丈夫」という油断から避難が遅れたのだそうだ。（日和山には、過去に閑上に津波が来たことを記した石碑が横たわっていたが、その言い伝えは語り継がれていなかった。）津波が来るかもしれないという危機感が少しでもあれば、ご子息の公太さんを含め、助かった方も数多くいたのではと思った。そして大きな地震が来た時は油断せず、冷静に判断し避難することが大切だと感じた。



丹野さんのお話で一番記憶に残っているのが、「親をウザいと感じることがあるだろうけれど、親はこどものことを一番に考えている」というメッセージだった。これを聞いて、思わず涙がこぼれた。親が自分に色々言ってくるのは、自分のことを考えて言ってくれているのだと知り、ウザいと思うのではなく感謝しようと思った。

それぞれのお話を聞いて、何気ない日常が一瞬の地震や津波によってなくなってしまう悲しみを痛感した。避難指示や津波でわが家に帰れないということなどは、想像もできなかった。これからは、何気ない日常を大切にして、夢に向かって生きていこうと心に誓った。

〔私の一枚〕

9月2日に訪問した、大川小学校の写真です。この写真は、大川小学校の近くにある山の上から撮影しました。この山に逃げていけば津波が来るのが見え、助かったのではと感じました。ここから景色を見た時、津波が来る前は住宅などがあったのに、一瞬の津波で何もかもなくなってしまったと考えたら、とても心が痛かったです。



宮城ボランティアに参加して

経済学部 1年 長谷川風沙

今回宮城ボランティアに参加して、「自分は何も分かっていなかったのだ」と痛感した。テレビや新聞等で見ても、知っていたつもりなだけだったのだ。その場所に赴き、初めて知ることができたことが沢山ある。

宮城県石巻市立大川小学校。108 人中 74 人が亡くなった。毎年体験学習を行っていたという裏山の高台に行けば、誰も犠牲にならなかったはず。しかしその判断もつかない程、現場は混乱していただろうし、誰も津波の脅威を分かっていたいなかった。目前で驚異的な速さで迫る津波を見て、子どもたちは何を思ったのか、想像したくても恐怖の他は何も分からなかった。

ご遺族の方のお話が忘れられない。語り部の鈴木典行さんは語る。土の中から、娘さんの名前が書かれた靴を見つける。掘り出して、抱き上げて、何度も名前を呼んでもやはり返事はない。遺体となった娘と一緒に帰りたい、そう思っても遺体安置所に預けなくてはいけない。その悔しさと切なさが心に染みて、私自身も涙が止まらなかった。

女川町の七十七銀行。指定避難所である堀切山は、走れば一分の距離。なぜ屋上避難だったのか、なぜ人命が優先されなかったのか。田村さんご夫妻は行方不明になった息子をずっと探した。熱く語る姿を見聞きして心がひどく痛かった。このことは深く考え、忘れないようにしなくてはならない。これから社会で生きる身として、防災は欠かせない。現在ならアルバイト先、大学、将来は勤務先の企業、それぞれの緊急時に行う対応、マニュアル等を見直す必要がある。

この 3 日間を経て、自分がどれだけ愚かな人間なのかと感じた。生きたくても生きられない、そんな人が多くいる中、今のままの自分でいいのだろうか。自分の人生観について、よく考えさせられた。地震等の災害はこれからも必ず起こる。犠牲者を少なくするため、ゼロにするために、私たちはこの事実を伝え続ける必要がある。そして現地に行くべきだと、実際に行ってお話を聞くべきだと伝えていきたい。私たちはご遺族から伺ったお話を、絶対に忘れてはいけないのだ。

【私の一枚】

こちらは 9 月 2 日に訪問した、大川小学校の高台での写真です。津波の到達地点から考えても、ここの高台に逃げていれば多くの命が救われていたことでしょう。鈴木さんから特別に許可をいただいて登った場所。この景色を見て、写真に写る敬愛大生の先輩方や私、みんなそれぞれ思うことがあると思います。



宮城ボランティアに参加して

経済学部経済学科 2年 田嶋ゆめ

初めて「宮城ボランティア」に参加した。被災してご家族を亡くされた方にも話を聞くことになっていたのですが、バスの中では少し緊張気味だった。

最初の語り手は、川内村の副村長さんだった。震災当日、川内村では震度6弱の揺れを計測したが、幸いなことに死者は出ておらず、すぐに災害対策本部を設置して避難所を開設するといった迅速な対応を、村長を中心にされたそう。隣接する富岡町からの避難者も受け入れたが、福島第一原発での水素爆発をうけ、川内村は村長の指示の下、全村避難を決断したそう。当時の村民のみなさんは、何を感じていたのか。私に分かることは、皆が生き残るために必死だったことだ。自分の住んでいた村に突然住めなくなり、放射線漏れの影響で、もしかしたら永遠に帰ることが叶わないかもしれない。そう考えただけで心がギュッと押し潰れそうになった。後に川内村の避難は解除されたそうだが、4年もの間、川内村の時間は止まっていた。やるべきことは山積している。除染作業や住民の新しい住居等の確保により、少しずつだが村には人が戻りつつあるらしい。私は近い将来、家族で川内村を訪れたいと思った。そして今度家族で訪れる時は、今より更に人が増えて活気に溢れた川内村が見られることを心から願っている。



2日に訪れた大川小学校跡は、現在は震災遺構として残されている。静かに佇む校舎だった建物は津波に飲まれてボロボロ、見ただけで哀しくなる。厳かな雰囲気の流れる場所。これが私の感じた印象だった。私はここであったことを、聞いた話、親御さんの思いを決して忘れないだろう。

震災が起きた後、私の家ではなるべく東北の食べ物を買っていた覚えがある。国内では東北産の食材に対する風評被害はあまり聞かなくなったが、震災直後の風評被害はあまりにも多かった。私なりの復興支援だと思い、私は今でも東北産の食材を買うようにしている。

2011年3月11日。ごく普通のこの日に地震が来るなんて、誰も予想ができなかった。地震に慣れていた地域の住民は津波の存在を忘れてしまい、結果多くの人が津波の犠牲となってしまった。さらに津波は、原子力発電所をも引き起こし、いまだに帰宅の願いすら叶わない地域も存在する。

私はボランティアで心に焼き付けた東北の光景を、忘れることはないだろう。そしてこれからも東北産の物を買って求め、私なりの復興支援を続けていこう。あの震災を忘れないために。

〔私の一枚〕

9月2日に訪問した大川小学校の校舎です。ユニークなデザインの校舎も、今ではコンクリートがむき出しになり、教室には窓もなく、全て津波の力で破壊されました。写真中央には震災前からあった植木鉢がそのまま保存され、今もボランティアの方々がお世話をしているそうです。変わり果てた校舎と変わらない鉢植えのお花たちに、悲しい対比を感じました。



宮城ボランティアに参加して

経済学部経済学科 2年 天間佳織

東日本大震災から7年。私は震災以降、何度か観光で東北に訪れたことがある。だが特に被害が大きかった沿岸部には足を運んだことはなく、被災地の現状を知らなかった。そこで私はこの活動を通して現地に赴くことで、微力ながらも何か自分にできることはないかを考えるため、今回の宮城ボランティアに初めて参加した。ここでいくつか、現地で見聞して感じたことや思ったことを報告する。



1 日目に訪問した福島県。道中、何度も線量計とすれ違い、放射性廃棄物を詰めたおびただしい数の黒いフレコンパックを見かけた。帰還困難区域の街並みはゴースタウンと化し、人気さえ感じられなかった。こうした異様な光景から、改めて放射線の脅威を感じた。

2 日目。宮城県に入り、大川小学校、女川町、閉上を訪問。津波でお子さんを亡くされた語り部の皆さんからお話を聞いてまわった。いつどこで起こるかわからない自然災害。防災教育の大切さや企業の防災対策のあり方について涙を浮かべながら話されており、日頃からの備えがいざというときに命を左右してしまう、ということを実感した。



最終日の3日目は、3大学が合流しディスカッションを行った。この場では「私たちにできること」について話し合い、私たちのグループは「被災地に赴くこと」「募金」「コミュニティ支援」などを挙げた。もちろんこの他にもできることはたくさんあると思うが、何事も行動に移すことが大切だという結論に至った。また、尚絅学院大学の学生の方から震災当時の状況や貴重なお話を伺い、教訓を語り継いでいくことが必要だと思った。

この活動を通して、私は被災地の方々と直接触れ合えたことが嬉しかった。そして、どの訪問も印象深く、忘れ難いものとなった。今後は、この活動で学んだことを友達や家族に共有していきたいと思う。また来年も機会があれば、ぜひ参加したい。

【私の一枚】

生徒 74 人、教職員 10 名の命が犠牲となった大川小学校。小学6年生だったお嬢さんを亡くされた語り部の鈴木さんが、学校の裏山に案内してくださった。斜面はそこまで急ではなく、容易に登ることができ、高さも十分にあった。登っていれば助かったはずだ。



宮城ボランティアに参加して

経済学部経済学科 2年 林咲輝

今回のボランティアに参加し、津波で被災された地域を初めて訪れました。それまでは旅行で近くを通ったり、ニュースで見たりする程度でしたが、その場所に足を下ろすと地震が引き起こした被害の大きさが改めてわかりました。

今回の活動は、大地震を経験し、大切な人を失った人たちのお話を直接聞くものでしたが、テレビや人づてに聞いた話とは違い、とても心に響いたお話でした。ちょうど語り部さんたちのお子さんと私は年が近く、地震が起きた日は小学校の卒業式でした。冬から春に季節が変わり、新しい人生を歩もうとしている大切な日に起きた地震は、学校最後の日であり親子が会う最後の日でもありました。どの語り部さんたちもあの日、子供を守れなかったことをとても後悔していました。

なかでも大変印象に残ったのは、丹野祐子さんのお話です。お話の前に津波が来たときの動画を見ましたが、建物の上にいる人々が大声で逃げている人に向かって、「逃げて！ 早く逃げて!!」と叫んでいる映像には、胸が締め付けられました。その後の丹野さんのお話でも地震があった日、「ここには津波は

来ないから大丈夫」と思っていた矢先に津波が押し寄せてくるのを見て急いで避難したものの、一緒にいたはずの息子さんがいなくなっており、心配でしかたがなかったそうです。結局息子さんは亡くなってしまったことを知り、毎日が後悔の日だと言っていました。丹野さんの「親は子供に生きていてもらうだけで親孝行だよ」という言葉は、今でも忘れられないです。



3日間という短い活動でしたが、学べたことは数多くあります。これからはその経験を活かして、後悔のない人生を過ごし、今後もボランティア活動に参加していこうと思いました。

〔私の一枚〕

最後に3校合同でディスカッションを行ったときの集合写真です。それぞれ違う語り部さんたちの話を聞いてきて、一人ひとりが感じたことを率直に共有できた、いい機会でした。



宮城ボランティアに参加して

経済学部経済学科 4年 佐藤克樹

今回初めて宮城ボランティアに参加した。被災地が今どのような状況にあるのか、実際に現場に足を運び、自分の目で確かめたくて参加することにした。

1 日目は川内村役場と双葉屋旅館を訪問し、行政のリーダーお二人からお話を聞いた。2 日目は大川小学校、女川、閑上の記憶を訪問した。3 日目は、名取市立小学校で慰霊碑などを参拝した後、尚絅学院大学で 3 大学合同学習会を行った。

実際に参加してみて、まだまだ復興が進んでいない地域が多く、震災当時のままで時間が止まっているかのような場所もあった。この 3 日間を通して、私自身一番深く心の中に残ったのが、語り部さんたち(鈴木さん、田村さん夫妻、丹野さん)の話だった。「津波なんて来ないだろう」と思って避難しなかった人たちが、多く犠牲になられてしまったということである。ちなみに私たちが訪問した大川小学校を襲った津波の高さは 8.6m だったそうだ。あの時、津波から避難して向かった先は、山ではなく川であった。そして、幼い子どもたちの命までもが津波で失われてしまったのだと思うと、とても胸が苦しくなった。ここで防災に対する知識、判断力、いつ何が起きてもいいよう準備しておくことの大切さ、また「命の大切さ」を実感した。



3 大学の合同学習会では、「大学生が被災地にできることはなにか、自分にできることは何か」について意見を交換しあった。様々な意見を出し合って、私は「寄り添って、話を聞いてそれを伝える、次世代につなげていくこと、そして忘れないこと」が極めて重要だと感じた。これから復興していくためにも人との関わり、結びつきが必要不可欠であると思った。

最近ではニュースでも、被災地を取り上げることが少なくなってきた。この宮城ボランティアで過ごした 3 日間を忘れることなく、今度は自分たちで被災地を訪問し、話を聞いて伝えていくということを継続してやっていきたい。

〔私の一枚〕

敬愛大学、西南学院大学、尚絅学院大学の 3 大学合同研修・交流プログラムの集合写真。他大学の学生と話をすることでボランティアに対する想いが変わり、自分たちにできることは何か深く考えることができた。このようにこれまでの活動を振り返り、お互いに情報や想いを伝え合うことも大切だと感じる時間だった。



宮城ボランティアに参加して

経済学部経済学科 4年 藤ヶ崎祐太

入学以来毎年参加していましたが、今年も参加させていただきました。

最初は福島県川内村役場で、全村避難から現在と未来について副村長からお話いただきました。2011年3月11日、川内村は震度6弱。そして原発の問題が発覚してほどなく、対策本部で全村避難が決定されたそうです。隣接する富岡町とあわせて避難対象が約5,700人。マイカーとマイクロバスで、郡山市に避難が行われました。そこでも様々な問題があったと聞きました。平成30年4月1日現在、村内生活者率は80.9%で、2割近い方がまだ戻ってきていないことがわかります。高齢者率も40.4%と高く、長く住んでいる住民が帰ってきていることがわかります。医療も十分とは言えませんが、自然が豊かで子どもたちにとってはいい環境だと思います。



小高区では、安部克己前区長にお話いただきました。震災当時行政ではなかなか情報が得られず、テレビからの情報に頼らざるをえなかったそうです。原発事故による避難も、国からの指示ではなく自分たちの判断で決めたと同じ、当時情報が乏しかった中での勇気ある判断ができたという話を聞き、大いに学ばせていただきました。

2日目は、まず大川小学校で語り部・鈴木さんのお話を聞きました。校庭で雪降るなか待機している時に、「こっちに津波がくるぞ」という声を聞き、やっと移動が始まったものの、結果津波の来る方向に歩き出すことになってしまったそうです。あの時になぜ山に逃げると言う判断ができなかったのか、山に逃げると言う判断ができれば多くの人命が助かったでしょう。女川では、2年ぶりに田村さん夫妻から当時の現状について伺いました。なぜか支店長の指示は、支店の屋上高さ約10メートルへの避難。そこにそれよりも大きい津波が襲ってきました。13人が流され、1人だけ奇跡的に助かりましたが、支店長やご子息の健太さんを含む12人が犠牲になり、うち8人は今も行方不明です。田村さんのお母さんは「こんな思いさせるだったら、生まない方がよかった」と涙ながらに語られた言葉は、私自身の心の中で刺さる思いでした、それが母親として息子さんを思う気持ちではないかと思いました。

3日間を通じて、まだまだ知らないことが実際にあり、やはり実際に足を運ばないと分からないこと改めて感じました。私自身今回の活動で学んだことを今後の人生と1人でも多くの人に伝えていきたいと思います。

〔私の一枚〕

私の一枚は、田村さんご夫妻と敬愛の宮ボラ参加した全員が映った写真です。みなでお話を聞き終わった後、みんなで集まって撮りました。今回の写真でも一番強く思い出に残る写真の一枚になりました。



「生きる」を考える

経済学部経営学科 3年 石川 滉

3回目の被災地訪問。自分の中で迷いがあった。最初に被災地を訪問してから2年という時間が経過したが、自分の活動が誰の、どのような役に立っているのか正直わからなかったためだ。そんな迷いや自身に対する疑問を持った迎えた3日間であった。

土の中に埋もれた肉親を捜す家族の姿を想像できるだろうか。児童・教職員84名が犠牲になった石巻市の大川小学校で、娘さんを亡くされた語り部の鈴木さんのお話を伺うことができた。震災当時、雪の降るような冷える日に校庭に避難した児童・教職員。一時、学校の裏山へ避難するという意見もあったが、無情にも河川近くの丘の方への避難となってしまった。鈴木さんが駆け付けた時には、津波によって押し寄せた瓦礫や、変わり果てた人の姿があったそうだ。最初の校庭内の探索では見つからなかった。しかし校舎から離れた、河川の対岸の山のへりに土砂によって生き埋めになった子どもたちが見つかったそうだ。このような出来事が、自分が生活している同じ時間に起きていたことが衝撃的であった。自分たちがこれから危機的状況に陥った時、何を優先するのかは自分の判断しかない。



集団の規律を守るのか、命を守るのか、その後を守るのか。

私たちと同世代の被災者の方たちが、語り部として活躍しているのと同時に、その責任の重さから引きこもってしまう人たちもいるようだ。この3年間の宮ボラで語り部の人たちから話を聞けるのが当たり前のように思っていたが、彼らにばかりに責任を押し付けてしまっている自分が恥ずかしく思えた。私たちは、簡単に「見る、聞く、伝える」と掲げるが、次は私たちが何かを与えたり、一緒にこれからの社会を考えたりしてゆく必要があるのだと強く思った。

今回のまとめとして、「生きる」、これが一番素晴らしいことであると再認識した。生きているからこそ、問題を解決でき、生きているからこそ、共感できるのだと。防災とは、「次に自分たちが生きるためにその地を訪れること」であると今回思った。

〔私の一枚〕

最終日、尚絅学院大学にて、福岡の西南学院大学を加えた3大学連携での意見交換会をし、その発表後の様子。全員で前に立って、一人ひとりが今回感じたキーワードを伝えられたのはとてもよかった。自分の考えをしっかりと言葉にして発言することは、防災に限らず、必要なことだと思った。そのおかげで仲もよさそうだ。(笑)



涙と復興と次世代への遺産

経済学部経営学科 3年 佐々木翔

震災から7年あまり。閉上や名取では復興が進み、徐々に震災の影はなくなっていった。周囲は見渡す限り新しい住宅が立ち並び、ここが数年前までは更地だったとは想像もできない。私が初めて宮城に赴いたのは、2016年の宮城ボランティアがきっかけだった。5年経った現地が今のように住宅街が並び立っている、当時は思っていた。だが実際は見渡す限りの更地だった。今では想像し難いことだが、ゆっくりだが確実に大きな損害を受けた町は生まれ変わろうとしている。



女川小学校はコンクリート建ての新しい校舎に生まれ変わり、駅前には商業施設が立ち並ぶ。震災の痕跡を残すのはもはや大川小学校や女川など特定の地域、本当に一部のみとなってしまった。学生に対して、女川での出来事を語ってくれた夫妻は、石碑の前で涙ながらにこう語る。「この景色は今、土手しかないが少し経てば工事が始まり、町ができる。だんだんと被災地を残すものは少なくなっている。」あたりまえのことがあたりまえでないと気づくのは、失ってからだ。だが、反面失ってから得るものもある。何気ない日常や日々の光景が、今がいかにか大切なのかそう感じる心は、そうならない限り、得られない。



多くの人にとって復興はいまだ、ハードのインフラ再生やソフトの産業再生など物質的な再生が強い。だが実際には、精神的な復興が欠かせない。人に話すことで気が楽になる人、反対に話してしまっただけでふさぎ込んでしまった人、様々な人がある。その一つひとつに丁寧に向き合い、何があったかを知り、伝えることこそが後世のためになり、また彼らの生きがいになる。

我々は歴史や物事に対して結果を求めてしまいがちだが、そこで何が起きたのか、どうなっていったのか過程を伝えることが後世への使命になるだろう。人は新しい目標に向かっていける。だがその分、過去を忘れてしまうくらいがある。未来と向き合うためにどう過去に向き合うのか、それが私たちに課せられた課題である。

〔私の一枚〕

被災地で学んだ3大学が集結してミーティングをした時の写真だ。遠く福岡から来た大学は、今年で最後の宮城ボランティアになるらしい。今の時代、災害はいつ起こるかわからない中国地方では大雨、北海道では地震と今でもボランティアを求める声はやまない。ボランティアをするものとして、問われるのはどこまで支援をするか、それを見極める力が今後重要になる。



つながり

経済学部経営学科 3年 武藤彰徳

僕は3年間、この宮城ボランティアに参加してきた。3年間実際現地に足を運んで、被災された方々の心の傷は変わらないものの、景色は少しずつ変化してきていることを感じてきた。その変化の中で、自分には何ができるかを考えてきた。それは、実際被災地に行き語り部さんの話を聞いて、感じてきたことを周囲に伝えること。そして被災された方々とコミュニケーションを取り続け、連絡しあうことである。



今回の訪問で語り部の方々の話から印象に残ったことは、「生きること」、「人を大切にすること」、そして「避難所を確認すること」。絶対に津波が来ないと過信して避難を怠り、適切な避難場所を決められないまま、津波に巻き込まれるというお話を通じて、命を守るためには事前に適切な避難場所を確保すると同時に、油断をすることなく念入りに備えることが必要だと分かった。

語り部の田村さんの話を聞いて、改めて気づいたことがある。それは人を大切にすること。会社にとっては社員が宝、学校にとっては生徒が宝、そして私たち一人ひとりにとっては家族や仲間が宝ということだ。



と同時に、「何か起きた時は原因究明をする」「大切なものは何かと考える」「人とのつながりを大切にすること」という田村さんの言葉を大切にしていきたいと考えている。

また多くの語り部さんからは、「平凡な生活がとても大切」「生きていることが幸せ」という言葉を伺った。自分が一日一日を大切に生きていくことができているかを感じ、改めて意識して行動していこうと思った。

私は3年続けて宮ボラに参加し、多くの方々から様々な話を聞いてきた。実際に現地に足を運んで聴いてきた話を、実は十分に私の周囲に伝え切れていないのではないかと感じている。改めて行動、実践を心がけていきたい。

〔私の一枚〕

こちらの写真は、女川町の語り部、田村さんご夫妻と敬愛大学学生32名で撮ってもらった、「前に向かう」という気持ちあふれる写真です。大学卒業まで野球チームでキャッチャーだったご子息の決めポーズを全員でしながら、ここでの学びを糧に前へ進もうと決意を新たにしました。



宮城ボランティアに参加して

国際学部国際学科 1年 栗山奈津美

今回、私は初めて宮城ボランティアに参加しました。現地に行くということは、自分の目で確かめることができ、実際に現地の人と同じ空気を吸うことができます。私はこれまで被災地についてテレビなど、間接的にしか知れていませんでした。しかし、今回実際に被災地を訪れてみて、テレビでは伝わらない、様々なこと体験できました。

大川小学校では、津波の恐ろしさが刻まれた建物を見ることができました。こどもたちが、あの日どのような状況だったのかを聞きながら、必死に想像しました。そしてこどもたちが登らせてもらえなかった裏山に登らせていただきました。お話を聞くと、何人かは山に登り助かっている人もいます。しかし大半の児童、先生は登ることなく、津波に飲み込まれました。裏山に登っていたら必ず生きていたとは限りませんが、もっと多くの命が助かったのではないかと考えて、涙が出てきました。先生の中で唯一、生き残った方は PDSD になり、今もなお当時のことを話せない状態だそうです。それもまた、津波が来た「あの日」の過酷さが表れているように思います。



女川町では田村さん夫妻に出会いました。一つひとつ丁寧に話していただきました。あの日のことを詳しく知ることができました。女川町は地形上、津波が高くなる地域でした。「なぜあの時・・・」ご子息を亡くされた田村さんご夫婦の悔しさが、ひしひしと伝わってきました。

「閉上の記憶」では、丹野さんに会いました。丹野さんもまたご子息を亡くし、悲しみ、苦しみました。私は丹野さんから自分の命の大切さを学びました。そして、親より長生きしようと思いました。自分が後悔しないために、やりたいことをどん

どんやっっていこう、とも思いました。

私はこのボランティアに来るまで、様々な迷いがありました。しかしそれがほとんど無くなりました。私の人生を変えるきっかけになったと思います。今回のように、被災した方々のお話を聞くことは、私にも現地の人にも得るものがあるのだと思います。一人でも多くの人に足を運んでみてほしいです。

〔私の一枚〕

9月2日に訪問した大川小学校の写真です。校舎から被害の大きさがよく伝わってきます。撮影場所は、大川小学校の児童たちが写生の授業などで使っていた裏山の中腹。コンクリートが広く打設されていました。震災前、学校の周りには家が建っていたそうですが、今は草が生え、何も無い状態です。



宮城ボランティアに参加して

国際学部国際学科 2年 グェン チィ トウイ チャン

初めて「宮城ボランティア」に参加した。1 日目は福島県川内村役場を訪問した。全村避難から現在、そして未来までの講話をうかがうことができた。その後、放射線量が未だに高い地域は、バスの車窓から見学した。震災から 7 年以上が経ったが、まだ家や店舗などは元の状態のまま。原発事故の影響で汚染された地は立入禁止のままで、人が住めないようになっていた。

2 日目は石巻市にある大川小学校跡で娘をなくした鈴木さんの思いをお聞き、本当に悲しくてたくさんの涙が出てきた。次に女川で、田村さんご夫婦のお話をお伺い、息子さんへの愛が非常にすばらしいと感じた。そして、閑上では丹野さんのお話を通じて、日本人が地震に慣れてしまっていることを伺った。私には地震はとても怖いものだが、なぜ日本人が冷静でいられるのかと不思議だったが、今はわかるような気がする。それは日本人が多くの自然災害を経験し、そこから学んでいるからこそなのだ。

私は去年、「引き出しアジアランチ」というプログラムで、岩手県気仙沼市と陸前高田市を訪ねたが、被災した場所は少しずつながら復興して再生してきていると思う。今回は実際に自分の目で見て、言葉で言い尽くせないほど感動した。



今回のボランティアを通して、大切なことをたくさん学ぶことができた。実際に行って、画面で見える映像ではなく、ありのままの町を、ありのままのひとたちを自分の目で確かめることができた。SNSでベトナムの友だちや親戚などに、自分の気持ちや知ったことや訪問した場所での話を伝えて、広めていきたい。

今回のボランティアに参加して、実際に現地に行き、沢山のことを学ばせていただいた。私は直接の被災者ではないものの痛みを感じられた。私は宮城県にて 3 日間で過ごしたため、千葉に戻って日々のニュース等で被災地の情報を知るたびに、辛い想いで一杯である。

いつも心の中から、応援している。

〔私の一枚〕

敬愛大学、尚絅大学、西南学院大学の 3 大学合同ボランティアのディカッションタイムの写真です。いろいろなお話を聞き、今後のできることを考えることができました。また、沢山の学生のアイディアや意見を交換できて、貴重な経験でした。



宮城ボランティアに参加して

国際学部国際学科 3年 グェン ミン タム

私たちは今回、宮城ボランティア 2018 参加者の一員として、福島県と宮城県を訪問しました。今回は私がいただいている民間奨学金団体の行事があり、一緒に出発することができませんでしたが、1 日目の夜に宿泊先のホテルで他の参加者と合流することができました。

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災は、発生から 7 年以上も経ち、震災の被害に遭った街にも、少しずつですが新しい家や学校も建てられつつあります。しかし場所によっては、学校等が当時のままの姿で残っています。そしてそこでは、多くの命が亡くなりました。



「ボランティア」という言葉からは食品とお金などの物資を届けることや、現地の人々と作業を通じて物の製作に関わるものだと思っていた私でしたが、今回はそのような体験はありませんでした。しかし私たちは現場に行って、恐ろしい災害を目の当たりにした方々、大切な家族を失った方々の話を聞き、自分の家



族や家などが津波で失われた方々の気持ちを知ることができました。震災からは 7 年以上が経ちました。しかし残された方々にとっては、「あの日」の記憶はまだ現実のものなのだ気づかされました。話を聞きながら涙も出てしまった学生が何人もいましたが、話してくださった方々の心も泣いている、と私は思いました。いくら泣きたくても泣けないことは、一番辛いことです。そういう意味で、今回の活動のテーマであった「伝える、つながる、続ける」をもっと広げていきたいと考えています。

〔私の一枚〕

最終日、大学生同士で行ったディスカッションを終えたときの写真です。同じグループの中で、いろいろな意見を出し合い、これからの私たちにできることを考えました。貴重な体験だったと思います。



震災の地で学んだこと

国際学部国際学科 3年 ホアン ティ フーン ロアン

私は「宮城ボランティア」の参加者として、初めて震災の地を訪問しました。私は3年前まで宮城県仙台市に住み、仙台市内の日本語学校に通っていました。私が知っている仙台は綺麗で立派な街でしかありませんでしたが、震災の爪痕が残る街を訪ね、様々な知識を得ることができました。

現地に来て、東日本大震災が発生してから7年間あまりが経ち、復興が進んで状況が大きく変化したことが感じました。そして語り部さんの話を聞き、震災前、震災の時、震災後の状況がわかってきました。



3日目に3大学合同で行ったディスカッションでは、他大学の大学生と意見交換することになりました。いろいろな人に会えて、貴重な経験することができました。ディスカッションのテーマであった「大学生が震災地にできることはなにか」という問いかけに、私は「自分の体験をみんなに伝えること」、「命の大切さ、尊さを忘れないこと」、「現地に足を運ぶこと」だと考えました。そして「ここまですればよい」ではなく、「いつまでも続けていくこと」も大切だと思います。

ベトナムの出身の私は、地震や津波を経験したことがありません。しかし被災者の方々の話をお聞きし、「亡くなった人たちは、生きたくても生きられなかったのだ」ということを知りました。絶対に命を大切にしなければならないと強く思いました。



私たちが住んでいる日本では、いつ災害がやってくるか、わかりません。今回の体験を、仲間や学校の人たち、周りの人、そしてやがて生まれてくる次の世代の人たちに伝えていきたいです。

〔私の一枚〕

9月2日に訪問した、女川町の高台の中腹に、ご遺族が建立された慰霊の石碑と鎮魂の花壇がある写真です。これは私にとって一番印象に残る写真です。この写真を見るたびに、私たちがこれからも最も頑張るべきことは「大切な命を守ること」だということを思い出すはずです。



宮城ボランティアに参加して

経済学部経営学科 4年 汪江平

2011年3月11日に東日本大地震が発生した7年前、私は中国にいました。この大きな震災のことは、中国でテレビや新聞などから情報を得ていました。被災された方々は、本当に大変だったろうと思います。

敬愛大学に進学してからは、大学からボランティア活動を紹介するメールも受け取っていましたが、日本語に自信がなかったため、ほとんど読むことをせず、目の前の学業に集中していました。3年生になった頃には、必要な単位をほぼ取り終えていたことに加え、日本語も少しは上達したため、ボランティア活動に参加しはじめました。ボランティア活動で学んだことは、とても多かったように思います。日本の文化を知る機会も増え、日本人の友だちも増えました。



さて今回の宮城ボランティア、私は都合で2日目から合流させていただきました。ですから印象に残ったのは、2日目の訪問地、そして3日目の三大学合同交流会です。2日目の訪問地である石巻市立大川小学校跡、女川町、そして名取市の「閑上の記憶」での語り部の方からのお話しに心打たれました。また3日目の交流会でも、様々な角度から勉強することができました。1年生からではなく4年生で初参加となった自分に後悔しました。宮城ボランティアは、すごく価値ある活動だと思います。中国人から見ると、日本は災害が多い国のように思われます。ですから来年の卒業後に、帰国するかどうか日本に残るか、ずいぶん考えました。災害が多い日本の人々は、災害の恐ろしさや我が身の守り方、災害への備え方についてよく知っているように思います。被災経験の乏しい私は、どうやって自分の命を守ればいいのか、正直のところ、不安です。自分で自分の命を守ることは大切ですが、自分一人だけで生きていくことはできません。自分の命を守りながら、同時に家族や友だち、周りの人々全ての命も、守られなければなりません。自らの経験をよい多くに人たちに伝えていくことで、人と人とを強くつなげることができるでしょう。

今回の機会を通じて、私たちが体験したこと、感じたこと、自分の目で耳で学んだことは、間違いなく将来の自分の力になるでしょう。

【私の一枚】

ここに集まった仲間たちみなで、自分や家族、仲間の命を守るために行動し、安全な社会を作るために頑張っていかなければなりません。様々な社会活動に参加すること、体験すること、チャレンジすること、知識を得ることなど、できることは沢山あります。みなさん、一緒に前向きに頑張りましょう。



宮城ボランティアに参加して

国際学部国際学科 4年 矢澤陸

宮城ボランティアには3度目の参加。今年も他大学と交流する機会があり、尚絅学院大学と西南学院大学の学生と「大学生ができること」というテーマで話し合いをした。私たちのグループは、「現地に行くこと」、そして「現地で見聞きしたことを発信することができる」という結論に至った。震災から7年と半年が経ち、東日本大震災のことがニュースや新聞で報道される機会は少なくなり、被災地の現状、復旧復興の進み具合は実際に現地に行かなければ分からないようになってしまった。被災者が恐れる「忘れられる」ということに対し、私たち大学生ができることは、被災地に足を運び、そこでの体験を自分の身の回りの人に伝えることであると感じた。



また今年の宮城ボランティアでは、過去に訪問した地に再び足を運んだ。大川小学校は一度訪れたことがあったので、驚くことはなかった。しかし、語り部さんの話を聞きながら大川小学校を見て回ると、地震が起きて津波が到達するまでの臨場感や津波の恐ろしさ、そして、この場所でたくさんの人が亡くなったということを改めて強く感じた。それと同時に守れた命もあったのではないかと考えた。学校の先生が防災



マニュアルを確認し、裏山へ避難指示を出していれば多くの命は助かったはずだと思った。女川の七十七銀行も同様である。高台へ避難していれば犠牲にならずに済んだ命があったはずだ。

今回の宮城ボランティアは、「未来」について考えさせられた。近い将来、ほぼ確実にくるとされている南海トラフ地震や首都直下地震。東日本大震災で犠牲になった人の命を無駄にしないためにも、東日本大震災から学び、備えることが大切だと思った。守れる命を確実に守るために、行政

は防災マニュアルや避難経路を見直し、市民に認知させることが必要である。また、企業防災、防災教育にも力を入れるべきだと感じた。自然災害を未然に防ぐことはできない。しかし、国民一人ひとりが防災知識をつけることはできる。災害が起きても余計な犠牲者を増やさない、災害に強い国を目指すことが大切だと感じた。

〔私の一枚〕

3日目に尚絅学院大学・西南学院大学とグループディスカッションを行いました。他大学との交流は新鮮で、大変有意義な時間を過ごせました。

写真は、グループディスカッション後にB班メンバーで撮ったものです。被災地に対して私たちができることについて考えるいい機会になりました。



精一杯生きるということ

国際学部 こども教育学科 1年 岩月 檀

私は震災以降東北を訪れたことがなかった。ボランティアに参加する前、震災から7年も経った東北を訪れる意味があるのだろうかと考えながら、出発当日を迎えた。

まず、ボランティアに参加する全員に助けられて3日間を過ごすことができた。私はあまり参加する方々をあまり重要視せず、参加内容だけを考えていた。しかしこのメンバーでなければ気付かなかった観点やこれまでの東北の状況など、先輩たちをはじめメンバー全員から自分にはなかった考えを持つことができた。

3日間の中で一番心に残った場所がある。それは大川小学校だ。私は朝日新聞の『津波でんでんこ』という連載を読んでいた。「児童が教師に『山さ逃げよう！』と必死に訴えていた」という内容を、今でもはっきりと覚えている。記事で知っていたことを現場で見たときは、波の高さ、そのときの逃げようと必死に訴える児童の様子、当時の雪が降るほどの寒さ、今まで経験したことのない緊急事態が起こっていて大人たちがどうしたらいいのかわからない様子、三角公園へ逃げている途中に襲っ



てきた津波、一人だけ助かってしまった教師のこと。挙げればきりが無いが、当時の様子が語り部の鈴木典行さんの話をきっかけに自分の中で水のようにあふれ出てきて、震災から7年経って、なぜもっと早く来ることができなかったのだろう、なぜこの場所を知らずに今まで暮らしてきたのだろう、と悲しみと自分への怒りで涙がこぼれた。

被災地は今でも復興活動に力を入れている。宮城県閑上地区にある閑上小中学校の慰霊碑に手をあわせ、周りを見渡してみると土地が真っ平らでなんにもないなあと心がさみしくなったが、復興公営住宅や戸建て住宅も建ち始め、かなり復興していると聞いた。人によって感じることは違うのだなと思い、来年はどうなっているかなと自然に考えた。しかし来年のことを言えば鬼が笑うというように、いくら考えてもそのとおりにはいならない。来年も来て、丹野さんが新しく飼い始めたワンちゃんを見に来ようと思った。

〔私の一枚〕

宮ボラ初参加にも関わらず、班の代表として意見を述べさせていただけたことは、貴重な思い出になりました。尚絅学院大学、西南学院大学の方、そして敬愛大学の先輩方と話すことができたのも本当に嬉しかったです。この場で3日間の感じたことを伝えることができました。いろんな場所を見に行っただけで、最後に意見交換をして、自分らしく生きていこうとすることができました。本当にありがとうございました。



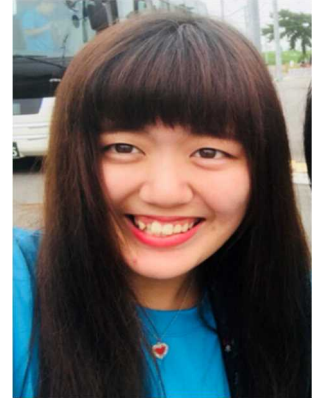
宮城ボランティアに参加して

国際学部こども教育学科 2 年 飯塚奈津美

東日本大震災後、初めて宮城を訪れた。私は当時 6 年生で、屋外で卒業制作のためタイヤのペンキ塗りをしていた。外にいたので、森や校舎の揺れ具合に恐怖を感じたことをよく覚えている。津波や放射線、言葉では何度も書いたが、どのくらいの脅威があるのかしっかり考えたことがなかった。

今回、放射能漏れによる全村避難をした福島県内の町村や、津波の被害が大きかった宮城県の沿岸部を訪れ、様々な角度からお話を伺うことができた。私が特に印象に残っているのは、大川小学校でのお話だ。

宮城県石巻市立大川小学校。北上川の近くにあるのどかな街のおしゃれな小学校であった。海からは 3.8km 離れていた。地震発生時、地震災害に詳しい先生が「この地震だと津波が来るから、山に逃げましょう」と訴えたそう。それを聞いた小学 6 年生が裏山は駆け上がったが、他の先生に止められ、山を降りた。ここまで津波が来るはずがない。校庭にいれば安心。しばらくは校庭にいた。そして 15 時 37 分、津波が来た。ちょうど川の近くの三角洲へ避難しているところだった。津波は川側と山側の 2 方向から来たことで、渦を作った。みんなが巻き込まれていった。



小学生にとっては先生が絶対で、先生の言うことが間違っているなんて、考えたこともなかっただろう。結果論的には、先生は誤った判断をしている。津波の恐怖を想像できず、ここまでは来ないだろうという危機感の低さがこのような結果をもたらしたのではないだろうか。先生だけでなく、大人と呼ばれる頼れる存在の人は、もっと危機感を持ち想像をすることが大切だ。

そのために今、なにができるだろうか。私は宮城ボランティアで今まで見ていた景色が変わった。そのため現地で見たこと、聞いたことを沢山のの人に伝えたい。沢山のの人に知ってもらいたい。そして、自分のことのように考えてほしい。自分のことのように考えてもらうには伝えるだけでなく、どのように伝えるかが重要である。まだ結論は出ていないが、語りから、写真から、映像から、沢山の伝え方があるので、少しでも興味の引く伝え方をしよう。

【私の一枚】

この写真は、名取市立関上小中学校である。この小学校は、建物の外側に避難階段があり、学校が閉まっても屋上まで行ける仕組みになっている。また屋上にはフェンスがあり、人が落ちないようにになっていることから、屋上を使用することが想定されて建てられたことがわかる。私の小学校はフェンスなどなく、屋上は立ち入り禁止だったことからとても印象に残っている。



明日をつくる

国際学部 こども教育学科 2 年 小林潤也

自分には関係ない。そんな震災だった。自分の家族、友だちは全員無事だから。当時 12 歳だった幼い私は、そう考えていた。しかし年を重ね、大人になるにつれてわかっていく、あの震災の悲惨さ。教師になる前に、「悲惨」で「恐ろしい」、「東日本大震災」というものに向き合う必要があると思い、今回の宮城ボランティアに参加した。

2 日目の午前、宮城県石巻市立大川小学校を訪れた。そこでは、当時の私と同年のお嬢さんを亡くした、鈴木典行さんのお話を聞いた。津波で流され、土に埋もれている娘を、自らの手で掘り起こしたと語る鈴木さん。私は、言葉にできない悲しみで、泣いていた。当時の私と同年の女の子。生きていたら、今年で 20 歳、成人式だ。鈴木さんは娘さんを見つけた時、「どうして、ここにいるのだ。」と叫んだという。どうしても受け止めることのできなかった、まだ大きな未来がある、小さな命の死。辛すぎる現実。

人間は現実を受け止め、そして「向き合う」。これが、なかなかできない。認めたくない。自分の愛する人が、自分の家族が、自分の友達があの震災で、あの津波で命を奪われるなんて。これは、現実ではなく夢だと、真実ではなく嘘だと思いたくなる。私も明日、地震が起き、大切なひとの命が奪われたら、受け止めることなどできないだろう。



しかし、鈴木さんをはじめ、女川で銀行員のご子息さんを亡くした田村さん御夫婦、閑上で中学生のご子息さんを亡くした丹野さんなど語り部の方々は、「語ることで、生きていたことを残していってあげたい」「もう 2 度と同じ被害は起こしてほしくない」と言う。大切なひとの死を受け止め、そして向き合っていた。心が強いのか。前向きな思考で考えているのか。

元から強い人間なのか。否、目を逸らしたくなるような過去や現実に向き合うことで強くなったのだ。「過去」に向き合い「明日」をつくっていた。

私は今回、足のすくみそうな現実、泣いてしまいそうな真実に、背を向けずに、歩いている宮城・福島の人々の本当の強さを知った。

〔私の一枚〕

9 月 2 日に訪問した宮城県石巻市立大川小学校での写真です。この写真は、大川小学校の隣の山から、小学校を撮影したものです。「この山に逃げていれば、この高さまで登っていれば、もしかしたら…」と考えさせられる写真です。



体験したことによって

国際学部こども教育学科 2年 鈴木舞花

今回、初めて宮城ボランティアに参加した。私は、地震や津波での被害はとてつらく、悲しい出来事で、震災当時の恐怖を感じた記憶から、参加するまでに震災について考えたり、自ら調べたり、情報をいれることを怖がっていた。しかし、福島や宮城で災害を経験した方々のお話を聞いたり震災遺構を見たりすることで、東日本大震災を少しでも知っている私たちの世代が深く震災について考え、調べ、いつ起きるかわからない新たな災害に対して教訓を生かして被害を抑えることはとても大切なことだと学んだ。



3日間で特に印象に残った場所は、2日目に訪れた宮城県石巻市にある大川小学校だった。大川小学校では、津波によって娘さんを亡くされた鈴木典行さんにお話を頂いた。自然豊かな大川小学校は、近くに北上川や裏山があり、児童数108名の大きな一つの家族のような学校だった。学校は、津波の被害にあい、74名の児童が亡くなった。川から大きな津波が来ることを予想していなかった先生方は、すぐ近くにある体験学習などでよく使用していた裏山への避難をせず、川の近くにある三角地帯の公園に避難を決めた。そして、避難をしているところに大



きな津波が押し寄せ、多くの児童が流されてしまった。このような被害になった一番の原因としては、明確な避難マニュアルがなく、津波が来る可能性があったのにも関わらず、津波に関しての避難訓練をしたことが無かったことだ。また、地震によって起きる津波に関しての知識不足から、慌てた状況での咄嗟の判断を誤ってしまったことである。

このことを聞き、私は小学校教員を目指しているので、住んでいる地域や場所が絶対に安全だと思込まず、災害が起きた時に咄嗟の判断ができるよう、避難マニュアルをしっかり確認し、困らないような準備、避難訓練をしたい。また、周りの人や次世代の人に宮城ボランティアで学んだことを伝え、このような出来事について深く考えていきたい。

〔私の一枚〕

この写真は、大川小学校の近くにある裏山から撮った、大川小学校の写真である。柱が倒れ、窓ガラスや壁が無くなっている状態から、津波の被害の大きさがうかがえる。児童のいない小学校はこんなにもさみしく、時間から置き去りにされてしまったように感じる。私は、宮城ボランティアで体験したことを絶対に忘れない。



宮城ボランティアに参加して

国際学部 こども教育学科 2年 平井芳樹

昨年に引き続き、「宮城ボランティア」に参加した。昨年参加して、初めて「被災地」を自分の目で見て、知らないことを知り、宮城ボランティアの大切さを知りました。今年は、テーマである『3の「つ」～つたえる、つながる、つづける』を実践できるようにと考えて、参加しました。

初日、時間の都合で川内村の天山文庫の見学はできませんでしたが、他の訪問地である川内村役場と南相馬市小高区は訪問することができました。2日目には「石巻市立大川小学校跡」、「女川町」、「日和山」、「閑上の記憶」を訪れました。最終日は、昨年は「閑上の記憶」に設置されていた慰霊碑(今春、新しい閑上小中学校に移設)を訪れた後、尚絅学院大学と西南学院大学とのディスカッションに臨みました。

川内村役場では震災後の全村避難やその後の取り組みの説明を聞き、厳しい震災の苦しみの中に人間の強さが見えたような気がしました。その次に訪れた南相馬市小高区では、福祉関係のスタッフの不足や若い人材が必要になっている現状を知ることができました。



2日目は、主に震災でお子さんを亡くした方々の話をお聞きました。なかなかこのような機会は滅多にならないことなので、丁寧に話を聞き、自分が就職した後に活かしていこうと思いました。また3日目は、自分が一番大切に考えてきたディスカッションをすることができました。自分以外の多彩な視点、自分の気づくことのできない考え方を沢山受け、昨年よりも視野と視点が大きく変化したように思えます。そして、他県の学生とつながることができ来ました。

この3日間で、3つの「つ」のうち、「つながる」は実現しました。ここから「伝えること」と「続けること」をしっかり行っていけるように、努力していこうと思います。

〔私の一枚〕

この写真は、最終日のバスの中で撮っていただいた写真です。今回宮城ボランティアに参加した1～4年生の学生です。去年と同じような全員の集合写真ですが、このメンバーだからこそ作ることでできた一枚だと思います。この写真が、今回の最高の一枚だと感じています。



「支援」から「支縁」へ

国際学部 こども教育学科 2年 宮野哲平

東日本大震災が起きてから7年が経つ。福島、宮城の両県を訪れ、現地の現状を知るとともに、実際に現地の方々からお話をきくことができた。少しずつ復興が進んでいく街並みをみていた中で、大川小学校跡は当時の地震や津波のすさまじさを物語っていた。渡り廊下はねじれるように崩れ、2階部には津波の跡が残っていた。他の場所とは違う何か独特な雰囲気すら感じた。

今回の宮城ボランティアでは確かに現地の状況を自身の目でみることも貴重であったが、なにより川内村の猪狩副村長や小高区の安部前区長、震災で家族を失った方々、被災地や大きな自然災害を経験した同年代の大学生からお話を聞くことができたというのは特に貴重であった。ご遺族の方々からのお話を聞くと、学校や職場といった組織の当時の行動指示に対しての憤りではなく、東日本大震災があったこと、家族が確かにいたということを伝えているように感じた。女川での田村さんにお話の中で、「遺族が伝える世の中から、遺族をつくらない世の中へ」という言葉があった。東日本大震災という大きな自然災害によって、多くの尊い命が失われた。そのことを忘れてはならず、改めて自身の防災に対する考えを改めなければならないと感じた。



2泊3日という短い時間ではあったが、様々な経験をした今の私に一番できることは、情報を発信することだ。現地の現状、被災された方々の様子、命の尊さ、「当たり前」は当たり前ではない…いろいろなことを伝えることが私の「しえん」だと考える。私は被災地に物資を送ることも多額の支援金を寄付することもできない。地域連携センターの藤森さんのお話の中に、「支援から支縁へ」という言葉がでてきた。その通りだ。活動のテーマである、つなげる・つたえる・つづけるの

「3つの『つ』」のように、今回の活動での繋がりを大切に、今回だけのものではなく何年も繋がっていくようなものにしていきたい。

〔私の一枚〕

9月2日に訪問した七十七銀行女川支店被災者家族会の石碑の後ろの写真です。ここでは、被災されて息子さんを亡くされた田村さんご夫妻からお話を伺いました。石碑には「語り継ぐ命」と掘られており、当時の震災について、またご自身の息子さんのことを語り継ぐことで、二度とこのようなことが起きず、尊い命を失わないよう訴えていくとともに、ご子息が生きた証としている。



宮城ボランティアに参加して

国際学部こども教育学科 2年 竹山幹人

今回初めて宮城ボランティアに参加し、震災後初めて福島へ行き、人生で初めての宮城だった。

初日に原発の影響で入れなくなった地域をバスで通る機会があった。やはり人がいないと思い、荒れ果てた街を確認した。その前後、原発の被害を受けた福島県の川内村と南相馬市を訪れた。そこではまず当時の状況というものを聞き、その上で今後の政策や事業、行政を話していただいた。そこで感じた印象は、「立ち止まっていない」ということだった。県外や市外に多くの人が避難してしまい、再び住むことができるようになった現在でも、戻ってくるのは高齢者ばかりで若者は戻りづらい現状だとの説明を受けた。その結果、川内村では住民の憩いの場としての温泉事業に力を入れ、地域の方がコミュニケーションを取れる場を設けるなど、今住んでいる人へのニーズを考えた施策に取り組んでいるそう。また南相馬市では新たな試みとして、ドローンをはじめとするロボットの試験場を作ることを目指していた。そこでは災害用や点検用といった、今後必要とされるであろうことに力を入れ奮闘しようとしている背景が見えた。



2日目以降は宮城へ。語り部さんのお子さんとの別れを、涙を流しながら聞いてしまった。もちろん自分のこどもを亡くしてしまった事実は変わらない。そんな辛い体験を踏まえて伝えていただいたことが、なにより重要なことだったと思った。津波の被害にも失敗や後悔があるようだった。そこから、今後起こるだろう災害の被害を最小にするために日々、語り部として動いておられるそう。将来教員としてなる身としては教育現場の災害への考えをもっと見るべきだと考えた。

〔私の一枚〕

私の一枚は、3日目に訪問した名取市立関上小中学校の正門にあった、津波の避難経路が記された看板だ。東日本大震災までは、津波が来た時の避難訓練を怠ることが多かったようだ。それに加え、避難経路や避難場所が曖昧なことが多かった。それをわかりやすく記し、目につく場所に置き、震災を忘れないというメッセージを、この一枚から読み取ることができた。



ボランティアに参加して学んだこと

国際学部こども教育学科 3年 池田駿也

私は今年初めて、敬愛大学が主催する宮城ボランティアに参加しました。あまりボランティアなどを経験していない私にとって、今回の経験はボランティアの暖かさや実際に行動を起こすことの大切さを学ぶ機会になりました。

このボランティアに参加するにあたって SNS で広めることを大事にしたいと思い、何枚も写真を撮ろうと考えていたのですが、現地の人々の暖かさや震災の恐ろしさを知っていくにつれ、写真よりも記憶に残したいと思う気持ちに変わりました。被災地では、復興が進んで道路や商業施設などが増えている一方、まだ手付かずの瓦礫や壊れたもの、放射線量がいまだ高くゴースタウンと化した場所など、被災地の現状を知ることができました。

私たちの活動は、主に語り部の方などから当時のリアルなお話を聞き、震災当時のことや現状について伺うことでした。私たちはその中で、沢山の大切なことや知らなかったことを教わりました。例えば、先ほど挙げたゴースタウンと化してしまった地域の立ち入りも許可がなくては立ち入ることができず、無断で立ち入った場合は罰せられてしまうそうです。間接的な震災の影響により亡くなってしまう「震災関連死」などに

についても、新しく知ることができました。その中でも強く心に残ったものが 3 つあります。1 つ目は、もし災害が起きたら決して災害を甘く見ずに何よりも逃げ、自分の命を自分で守る「率先避難者」になること。2 つ目は、もしもの時のために避難場所を決めておくことなどの防災意識をもつこと。そして 3 つ目は、私たちは心のケアができるということを知ることができました。

私はこの経験が無駄にせず、身の回りの人に防災に対しての意識を向上してもらおうとともに、実際に現地に足を運んでもらえるように、福島の伊ワナの美味しさや涼しさ、宮城県の牛タンの美味しさや大川小学校や女川、閑上などで学んだ暖かさや悲しさを、もっともっと皆に共有していきたいです。まずは私の家族から防災意識を共有してみます。



〔私の一枚〕

大川小学校の裏山の写真です。伺った後に、インターネットで調べました。そこで大川小学校の教員に対する批判の多さに衝撃を受けました。確かに多くの児童が亡くなり、学校側の対応が不適切であったかもしれません。しかし雪の残る山、土砂崩れも考えていたのではないかと思います。生徒を救えず亡くなってしまった先生方も悔しかっただろうと感じ、複雑な思いで後にしたこと覚えています。



上を向いて歩こう

国際学部こども教育学科 3年 石川晃太

宮城ボランティアに参加し、あの未曾有の大震災、大津波から7年が立った今でも爪痕を残す自然災害からたくさんの刺激を受けるとともに、多くのことを学ぶことができた。また、新たな夢が一つできた。

1 日目に行政の方々の話を聞いて感じたことは、復興前の町を取り戻すのは難しいということ。以前はどんなに小さい町でも、その町独自のコミュニティがあり、高齢者から子どもまで一緒に住んでいた町が、「3.11」を境に生活が途絶えてしまった。避難指示が解除された今でも、元の姿は取り戻せていないのが現実であるなか、テレビでは放送されない問題を直に話を聞くことができた。戻ってきた人を外に出さないために、コミュニティやインフラ、産業の再生をして「新たな町」として復興していくとおっしゃっていた。また実際に見聞きして学ぶことの大切さを改めて感じた。中でも双葉町の誰もいない廃墟と化した様子をバスの中から見た時は、今の日本にこのような町が存在することにとっても驚いた。



実際に津波で我が子を亡くされた方の話を聞いて、心に残っている言葉がある。「私たちが生きているこの時間が、亡くなった子が行きたかった時間」という言葉が大川小学校で話を聞き、とても考えさせられた。一人ひとりの命がどんなに大切なものか、一日一日の大切さを改めて考えさせられた。日々の避難訓練などに発災前にどれだけまじめに取り組めるか、起こることを前提に教員が深く考えられるかが大切だと思った。女川で語り部のお母さんが、何度も天を見上げていたのが印象的で、天国の子どもから何かパワーをもらっているのではないかと思った。

3 日間を通して、実際に現地に行かなければできない経験を、沢山することができた。学校現場では、何があっても子どもが亡くなるということがあってはならない、そのために大川小学校で起こった出来事をより考えていくことが大切である。将来学校現場に出たときに、防災教育に力を入れていきたい。それが新たな私の夢だ。ここから先、今回学んだことをたくさんの人に話をして、ボランティアの役目を果たしていきたい。

【私の一枚】

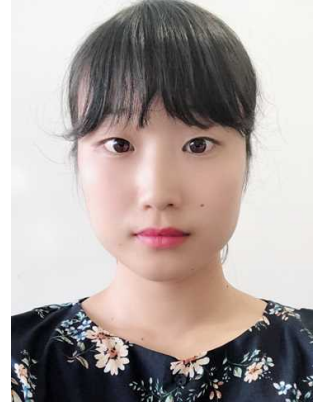
8月2日に訪問した閑上地区の写真です。「閑上の記憶」でお話を聞いた後に、真横にある太平洋を撮りました。初めて震災で被災した地区に訪れて、撮った写真のどれもが心に残る1枚であったが、この写真を選んだ理由は、穏やかな海だったことです。この穏やかな海があの日、たった1日だけ、荒れた。この写真からたくさんの出来事が蘇るし、語ることができる。ずっとこのままの海で欲しい。



いろいろな人の思いを背負って

国際学部こども教育学科 3年 榎本海風

参加する前、私は悲しく暗い気持ちで帰ってくるものだと思っていた。訪問した先々でそれぞれ大切なものを失ったと語る語り部さんから貴重なお話を伺ったが、どなたも前を向き、震災の記憶を消し忘れるという選択肢ではなく、いろいろな人たちへ繋いでいこう、伝えていこうとしている姿を見ることが多かった。むしろ私自身が元気づけられた。お話をしてくれた人の中には、私と同年だった人を失ってしまったという人がいて、すごく胸が痛くなった。生きたくても生きられなかった人がたくさんいるのだと気づかされた。だからいま生きている私自身が前を向いて、精一杯生きていかなければならない。



今回は様々な人との出会いがあった。人と出会うことで、いろいろなことを知り、気づかされる。ディスカッションで一緒になった学生同士も、住むところが全く違うため、新しいことを知ることができ、伝えることもできた。この活動は、人とのつながりはとても大切で貴重なものであると感じた。

最後に、“当たり前”というものは存在しないのだと感じた。お話の中で、「想定外だった」「津波で襲われることはないと思っていた」という言葉をよく耳にした。

“当たり前”なんてものはない。もしかしたら、今日死んでしまうかもしれない、今地震が起きて今ある普通の生活が途切れてしまうことがあるかもしれない。だから私は、今ある生活やともに過ごしている人にたくさん感謝をしながら生きていかなければいけないのだと思う。いつの日か“おかえり”や“ただいま”の言葉が言えなくなってしまう時が来てしまうかもしれない。その言葉にもっと大切さを感じ、生きていきたいと思う。



この3日間の活動を通して、実際に足を運ぶことで分かったことがたくさんある。勇気をもって伝えてくれた語り部さんたちの思いを無駄にしないようにしたい。そのためには、3日間で知ったことを周りにいる人に伝え、率先避難者になれるよう防災についての知識をつけていきたいとも感じた。将来小学校教諭になったら、沢山の小さな命を守らなければならない。今回の活動がいつの日か意味のあるものになっていなければと考えている。

〔私の一枚〕

9月2日に訪問した、女川町での写真。私はこの“語り継ぐ命”という言葉に、とてもぐっときました。その人自身の命が失われてしまっても、その人の気持ちや思いをつないでくれる人がいれば、その人たちの心の中で生き続けるのではないかと思います。人と人をつなぐものは、その人の想いや願いであると思います。私もつなげていきます。



宮城ボランティアに参加して

国際学部こども教育学科 3年 柏倉 雄希

3日間で福島と宮城県を訪問した。私はどちらの県も訪れるのが初めてだったので、震災が起きてから今に至るまでテレビや新聞などでしか情報得ることをしていなかった。だから今被災地の人たちはどのような生活をしているのか、どんな思いをして生活をしているのかを知らなかった。

私は3日間の中で、語り部の方々がしてくださった話がとても印象に残っている。初めに大川小学校を訪れた時に学校を見た時は衝撃を受けた。残った建物は津波で壊されており、空中廊下が曲がっているのを見ると津波による被害が大きかったことがわかる。地震が起きた時に、学校では「想像をしていなかったことが起きた」という話を聞き、将来小学校の教員を目指している自分としては、子どもたちの命を守る立場として防災の知識をつけることは重要だと感じた。女川町での田村さんの話は心に刺さるような話だった。「こんなことなら、子どもを産まない方が良かった」という言葉は、心に刺さるような感覚だった。子どもの命を奪った津波のことなど思い出したくないはずだが、ここで話をし続けることは、亡くなったわが子と向き合うことだと話をしてくださった。閑上で話をしてくださった丹野



さんからは、ご子息が楽しみにしていたマンガ雑誌を今も毎週買ったり、三食ご飯を用意したりしているという話を聞き、震災で受けた心の傷は癒えてはいないが、しっかり起きてしまった事実と向き合っているように感じた。なにより、今もお子さんを愛しているのだなと感じた。

田村さんから、「親より長生きすることが最大の親孝行」という話を聞き、何事にも前向きにチャレンジしようという気持ちになった。私は性格が少し後ろ向きになりがちだったり、悩むことが多かったりすることがあるが、この言葉に勇気をもらい、前向きにこれから頑張っていこうと気持ちにさせられた。

被災した方々の心の傷はまだ残っているが、震災としっかり向き合うことが大切だと感じた。

〔私の一枚〕

2日目に訪問した女川町での田村さんの話を聞いている写真。田村さんの話は言葉一つひとつが心に刺さるようだった。ここで聞いた話は3日間の中でも特に印象に残っている。田村さんは亡くなられたわが子と、起きてしまった震災にしっかり向き合っていた。この震災の記憶を忘れることなく何事にも挑戦していこうという気持ちになった。



未来に残す震災の記憶

国際学部 こども教育学科 3年 栗原千佳

私は今回初めて宮城ボランティアに参加しました。東日本大震災から7年。宮城ボランティアに参加する前、私は被災地が現在どのような状況なのか、復興がどのくらい進んでいるのかあまり知りませんでした。知らなかったというよりは、目を背けていたのかもしれません。

双葉町付近の帰還困難地域をバスから見たときに、衝撃の光景を目にしました。廃墟となったコンビニがありましたが、その周りには大量の草が生えて放置されていました。また入口の自動ドアは半開きで、まさに「時間が止まったまま」の状態でした。復興から取り残された地域がある現実を知りました。

今回の宮城ボランティアでは、たくさんの語り部さんのお話を聞くことができました。その中で私がとても印象に残っているお話は、2日目に訪問した大川小学校での鈴木さんの話です。鈴木さんは当時6年生だったお嬢さんを津波で亡くされました。津波が起こった翌日に娘さんを迎えに行った際、土砂の中から手で掘り起こした時に出てきた上履きに自分の娘の名前が書いてあったと聞



いた時の衝撃は、今でも忘れられません。「なんて残酷なことなんだ」と私は涙が止まりませんでした。この大川小学校で聞いたお話で感じたことは、いかに防災教育が大切なことなのかということです。私は将来、教員になった時に生徒一人ひとりの命を預かっているという責任を常に感じながら仕事をしなくてはいけない、強く感じました。

この宮城ボランティアに参加し、自分自身が復興のためにできることは何だろうと考えました。それは「伝える」ということだと思います。長沼さんのお話を聞いて思ったことは、震災が起こる前も震災が起こった後も宮城県には素敵な町がたくさんある、ということです。そんな素敵な町を訪れないのはもったいないと思いました。だから実際に宮城県を訪れた私たちが、宮城の素晴らしいところをまだ訪れたことがない人に伝えなくてはいけない、と強く感じました。そしてもう一つは「震災の経験を伝える」ということです。これからの世代は東日本大震災を知らない世代です。その世代に私たちが今回お話を聞いた語り部さんの話を伝えることが大切だと思いました。

【私の一枚】

この写真は、2日目に訪れた大川小学校の近くの三角公園にあるひまわりの写真です。津波で亡くなった子供たちのお母さんが大切に大切に植えたひまわりです。私は『ひまわりのおか』という絵本を読んでからこのひまわりを見たので、とても感動しました。



宮城ボランティアに参加して

国際学部 こども教育学科 3年 篠崎隆史

今回宮城ボランティアに初めて参加し、また福島、宮城を初めて訪れた。宮城ボランティアを通して多くのことを知ることができ、たくさんのものを自分の目で見る事ができた。

今回の活動を通じて、私が考えたこととして大きく分けて3つある。

1つ目は「忘れない」、ということだ。今回ボランティアに参加して、語り部の皆さんのお話や、行政のリーダーとして今後の復興に向けての取り組みのお話を伺い、また写真で当時と現在の風景を見比べる機会もあった。様々な話の中には、被災され家族を失った悲しみや、学校や会社の安全面に対することなどいろいろ話していただいた。お話を聞きながら、私は悲しいことだと感じるだけでなく、日頃考えていなかった安全に対する意識が変わったように思う。

2つ目は「伝える」、ということだ。私が宮城ボランティアに参加して学んだことを家族や友人に共有することによって、今後の教訓にすることができた、いつ起こるかわからない自然災害に対しての安全意識が持てると感じた。また、東日本大震災があったと次世代の子どもたちに語り継ぐことによって、東日本大

震災ということがいつまでも風化しないと考えた。

3つ目は「訪れる」、ということだ。これは尚絅学院大学と西南大学とグループディスカッションを行った際に、全員で考えついたことだ。やはり今回でつながりを終わらせるのではなく、ボランティアや旅行などで再び行くことが、何よりも復興の手助けになるのではないかと思った。また家族や友人と行くことによって、被災地で起きたことをわかりやすく伝えられると考えた。

最後に、今回のボランティアに参加して、沢山のひとたちとの縁を実感できた。また、沢山のひとたちに支援されたことによって行えた活動であったと、心から感じた。



〔私の一枚〕

この写真は、石巻市立大川小学校跡地で鈴木典行さんのお話を聞いている写真だ。若くして震災で失ったお嬢さんを失った当時の思いや今の気持ち、また大川小学校で何が起きたかをこと細かにご説明いただいた。



つながる

国際学部こども教育学科 4年 関千洋

私が大学生活で唯一、4年間続けた宮城ボランティア。この「続ける」ことの大切さは4年間宮城に足を運ぶことで実感できたように感じます。大学に入学する前、「たくさんボランティアに参加したい」と意気込んでいましたが、こんなにも宮城に思い入れが深くなるとは思っていませんでした。その中で人との出会いは、私を大きく成長させてくれました。

初めて宮城ボランティアに参加するとき、私には「何かしてあげたい」という強い思いがありました。しかし仮設住宅に住んでいる方とお話したり、ご家族を亡くされた方のお話を聞いたりしているうちに、自分にできることは何だろうと考えるようになりました。それと同時に、自分にできることは本当にちっぽけなことだと感じ、もどかしく思いました。そんな中、関上の長沼さんからこんな言葉をかけてもらいました。「宮城に来てくれるだけで元気をもらえる」と。何かしなければ、と気負うことなく、何度も足を運んでほしいと言われ、復興とは何なのか、自分にできることは何なのかに気づくことができました。



今年は、以前訪れた場所や、再会となる語り部の方とお話をしていく中で、改めて「足を運ぶ」ことの大切さを実感しました。顔を覚えてくれていた方や、「毎年来てくれてありがとう」「また会おうね」「今度は家に遊びにおいで」と温かい言葉をかけてくれた方との出会いに、とても感謝しています。3年前は元気をあげたいと思っていたことが、3年後には逆に元気をもらっています。復興とはこういうことなのかなと、4年間を通して少し分かったような気がします。

私は4月から小学校教員です。子どもたちの命を守ることはもちろんですが、地震に対する恐怖や不安もあります。「歴史は繰り返される」という言葉の通り、避けては通れない

現実。その中で出来ることは、避難訓練や防災マニュアルの確認、そして私が見て、聞いて、感じたことを子どもたちや周りの人に伝えていくことだと思います。自分の命は自分で守るということは絶対です。私は教員として、4年間宮城で学んだ一人として、周りを助ける存在になれるよう頑張ります。

〔私の一枚〕

この写真には「つながる」「つたえる」「つづける」がたくさん詰まっています。このボランティアを通して、たくさんの人と繋がることができました。一人ひとりが「自分にできること」を考え、皆で共有した時間はとても貴重でした。宮城で吸収したことを、今度は私たちが伝えていきます。そして、大学を卒業しても、大人になっても、何度も宮城へ足を運びたいと思います。



4 年間でボランティアの答え

国際学部こども教育学科 4 年 田地野凌生

私は大学 4 年間で、毎年の宮城ボランティア、そして 3 年次の「ボランティアシンポジウム」と 5 回、宮城県を訪問しました。東日本大震災という大きな災害が東北を襲ってから 4 年が経った頃、私は初めて宮城を訪れました。初めて見た宮城は衝撃が多く本当の意味でこの地震や津波の大きさを痛感し、この活動を続けていきたいと思うようになりました。

2 年目、3 年目では、「1 年前とはどう変わったろうか」「今年はどんな人と出会えるだろうか」ということを意識して活動していました。1 年前にはなかった建物ができていたり、山を崩して土盛りがしてあったり、通りの道の福島では汚染物質が入った土嚢袋が減っていったりと、少しずつ少しずつ、でも確実に復興への道をたどっていました。しかし、復興とは建物さえ元に戻ればいいわけではありません。仮設住宅も、土盛りも、インフラ整備も、すべてはそこに住む人たちのために行われます。そして、被災された方々の心のケアを決して忘れてはいけないと感じた時期でした。



4 年目の今年は、最後の宮城ボランティア。なんだか知っている人が増えてきました。長沼さん、田村さんご夫妻、以前から話には聞いていた丹野さん、尚絅学院大学の先生方やすーちゃん、さえっち、今年新たにお話しさせていただいた方もたくさんいます。今まで話す機会がなかった敬愛大学の他学科、他学年の学生とも話すことができました。私はこの 4 年間で、たくさんの人と出会いました。この、人との「出会い」が私の宝物であり、大切にしていきたいと思っています。今回のテーマでもある「つながる」が、宮城ボランティアの意味だと私は思います。あとの「つづける」「つたえる」は、つながっていればあとから勝手についてくるものです。ボランティアだから何かしなければいけない、役に立たなければと気負う必要もなく、東北地方に足を運びたくさんの人と話をしてこの地震があったことを忘れないことがこの宮城ボランティアの意義なのかなと思います。そしてまた、ボランティアとしてのみならず仕事でも旅行でも、「また来たよ〜」って東北を訪れ、ご飯を食べて、お酒を飲んで、いろんな人とたくさん話をしたいと思っています。

【私の一枚】

これは、最終日に尚絅学院大学、西南学院大学の皆さんと一緒に撮った写真です。2 年目となるこの交流会ですが、今まで話したことがなかった学生や、初めて顔を合わせた学生も多く、また新たに様々な人と出会えた素晴らしい機会でした。



宮城ボランティアに参加して

敬愛学園高等学校 2年 福島健輔

2011年3月11日、当時小学3年生だった私は、地震と津波のすさまじさ、恐ろしさに圧倒されました。宮城への災害支援ボランティアは私に様々な思いと出会うきっかけをくれました。

私に大きな変化を与えたのは、2日目の開上の記憶での話を聞いた時でした。1日目にバスの窓を越して見える草の生い茂った家、ガソリンスタンド。それらを見てうすうす感じてはいましたが、2日目の話ではっきりとしました。災害は人も町もつながりも何もかも突然と奪っていくものであると。私は津波の動画を視聴し、あまりにも衝撃が強すぎて声が出ませんでした。近所の人そして自身の子供を失った時の話を聞いた時、ただ悲しみと辛さという思いが感じられました。

しかし、何もかも奪っていくと言いましたが、それは全てではないということにも気づきました。家族や友だちを失ったとしても、その人たちの「記憶」には残るのです。その「記憶」をなかつたことにしないために、人は「記憶」を伝えていくと思いました。女川での田村さんご夫妻は、「多くの人と会うことが、自分の財産

になる」とおっしゃっていました。その「記憶」をこれからも色々な人に広げることで、亡くなった方々を「記憶」として生き続けるように進み続けることが伝わってきました。

今でも、沢山の人たちにこの3日間の話を聞かれます。そこで私は、この宮城ボランティアの「記憶」をなかつたことにしないために、私自身も伝えていくことを決めました。それが被災者の人々への支援になるのです。学ばせていただいたことは、「進み続けることをやめないこと」だと思いました。

いつかまた宮城へ、今度は自身で行ってみたいと思います。



〔私の一枚〕

大川小学校での写真です。以前は学校の周りに街があり、沢山の住宅もあったそうですが、津波で何もかも流されてしまいました。私の中で、ここに人が沢山いたのが浮かび上がりました。しかしこの写真から全て流されてしまったことがうかがえます。初めて津波の恐ろしさを、目で見て実感した瞬間でした。



行政から見る復興の仕方

経済学部経営学科 専任講師 村上翔一

拝聴したお話のうち、行政面について書かせていただく。この度の宮ボラでは、猪狩貢氏(川内村副村長)と安部克己氏(南相馬市市民生活部生涯学習課小高生涯学習センター所長)から、震災時の対応、これまでの除染やインフラ設備等の活動、直近の活動や今後の活動計画を伺った。

川内村は段階的に避難指示が解除され、2016年6月14日、村全域の避難指示が解除された。これにより、村全体を対象とした新たな村づくりプランが構想・実施されていることを猪狩氏から伺った。様々な事業の共通点は川内村の土地活用や村民の活躍といった文化の尊重と思われる。例えば、従来から川内村の主産業である農業の促進、新たな農業等の振興やワインの醸造、複合商業施設・カフェの設置やマラソン大会の開催等がある。



次に、安部氏から南相馬市に関するお話を伺った。南相馬市は、未だ一部地域が帰還困難区域に指定されている。これによるかは不明ではあるが、川内村とは異なる復興計画「福島ロボットテストフィールド」というロボット産業化の拠点の設置が2018年度から行われている。これは今後の先端ロボット技術を開発する拠点としての役割を担うものである。

被災地行政の比較を行うと、川内村では従来からの文化の重視、南相馬市では新たな産業を通じた地域の勃興、と分けることができる(紙幅の都合上省略したが、両行政とも従来の住民を大切にしていることは言うまでもない)。どちらが良いかは一概に判断はできない。しかし、猪狩氏と安部氏の両者とも、「震災前の状況には戻らない」と述べており、これから地域をどのように活性化するかに苦心されており、対応が難しいことが伺える。



行政とは異なるが、閉上市にお住いの長沼俊幸氏(ナガスマ住設代表)は、「たとえ被災地であったとしても、ふるさとはいい場所。生まれ育った町のにおいを感じる。高齢者しか戻ってこないと思うが、以前のような町に戻りたい」と述べており、復興の難しさを痛感した。

宮城ボランティアに参加して

アドミッションセンター 古山理恵子

宮城ボランティアに引率として初めて参加させていただき、学生たちの活動を見守るとともに、自身も様々な方のお話を伺い見学をすることで貴重な体験をすることが出来ました。

2日目には、語り部の方から体験や現状など現場の声を伺いました。東日本大震災の被災者遺族の声はテレビを通しての情報しか知らず、初めてお話を聞くことで、被災者にはそれぞれの思いや体験があり、一括りには出来ないと改めて感じました。話の内容はとても壮絶で悲しく、語り部の方も仰っていましたが残酷なものでした。話の中で、亡くされた娘さんは学生たちと同年代であったこともあり、自分たちに置き換えて涙する様子もあり、それぞれが思いを胸に聞いていました。当時の状況を思い出してつらい気持ちにもなる中、震災時の現場の状況、思いを詳しく話してくださり伝えたいという思いを強く感じ、言葉に重みがありました。なぜこうしなかったのかという後悔の思いも聞き、自分はそこで判断が出来たか考えても想像はつ



かず、お話を聞くことで今後我が身に起きた際に、知識があることで判断の助けになると思いました。また、語り部の方も自身の体験談を通じて減災することを願っているのだろうと考えます。お話では共通して、震災時の状況や震災前には私たちと変わらない生活があったこと、怖さや生きるための判断の大切さを知り、伝えて欲しいという思いがあると感じました。学んだことを身近な人や将来親になった時に子どもに伝え、震災があった現実を伝え続けることがまず出来ることであり、「3 つのつ」の重要性を体感出来ました。

3 日目のディスカッションでも、「伝えることが重要」との意見が多くあり、皆が「3 つのつ」を実践するだろうと感じます。教員を目指す学生にとっては教育現場での防災教育に関して考える良い機会となり、私自身も考えるきっかけとなり、今後学生や自らも安全に過ごせるよう考える必要性を学びました。

実際に現場の生の声を現地で聞くことで心にも響き、貴重な体験をさせていただいたことに感謝いたします。共に学ばせていただいた学生、語り部の皆様やご協力くださいました全ての皆様に御礼申し上げます。

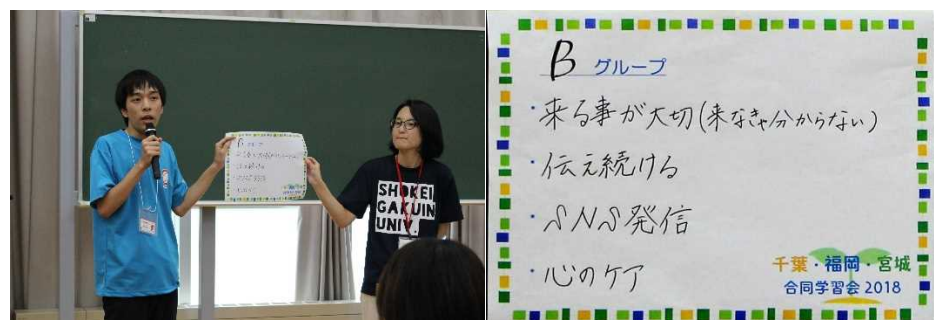
3 大学合同研修・交流プログラム

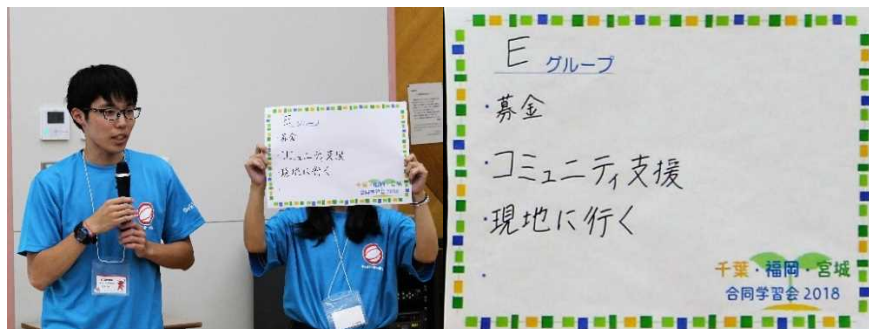
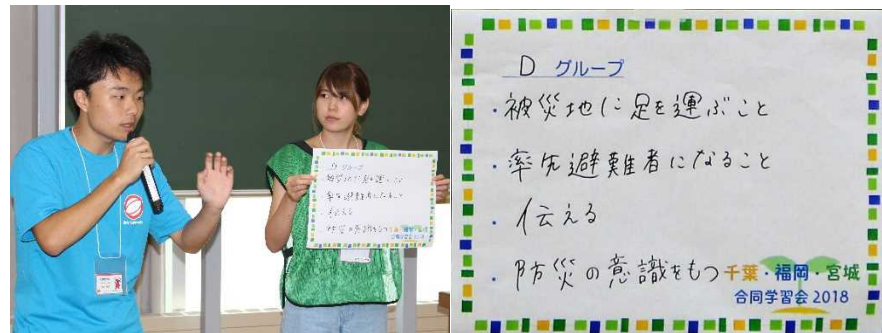
3 日目に尚絅学院大学で行った合同研修・交流プログラムでは、敬愛大学と尚絅学院大学、そして西南学院大学(福岡市)の学生が一堂に会してディスカッションを行いました。

グループワークでは、「これまでの活動や被災地で聞いてきた話で印象に残ったこと、感じたこと、気づき」「大学生が被災地にできることはなにか、自分にできることはなにか」というテーマで、8 グループに分かれて行われました。グループ内では、「全員がファシリテーターになる」「誰の意見も否定しない」といったルールに基づき、活発な意見交換が行われました。一人ひとりがワークシートに書き出した考えを共有し合い、各々のグループで1枚のシートに書き出しました。その後グループ毎に全員の前で発表し、参加学生全員でも共有をしました。またそれを受け、各大学の学生や引率教職員からも意見発表があり、充実した3時間となりました。

なおグループワークに先立ち、毎年閑上で敬愛大学の学生たちを応援してくださる、長沼俊幸さん(元愛島東部仮設住宅団地自治会役員、閑上在住)からも、お話をいただきました。

このページでは、各グループがまとめた内容を、写真で振り返ります。





(参加学生)

経済学部	1 年	猪又 唯衣
	1 年	長谷川 風沙
経済学部 経済学科	2 年	田嶋 ゆめ
	2 年	天間 佳織
	2 年	林 咲輝
	4 年	佐藤 克樹
	4 年	藤ヶ崎 祐太
経済学部 経営学科	3 年	石川 滉
	3 年	佐々木 翔
	3 年	武藤 彰徳
国際学部 国際学科	1 年	栗山 奈津美
	2 年	グエン チィ トゥイ チャン
	3 年	グエン ミン タム
	3 年	ホアン ティ フーン ロアン
	4 年	汪 江平
	4 年	矢澤 陸
国際学部 こども教育学科	1 年	岩月 檀
	2 年	飯塚 奈津美
	2 年	小林 潤也
	2 年	鈴木 舞花
	2 年	平井 芳樹
	2 年	宮野 哲平
	2 年	竹山 幹人
	3 年	池田 駿也
	3 年	石川 晃太
	3 年	榎本 海風
	3 年	柏倉 雄希
	3 年	栗原 千佳
	3 年	篠崎 隆史
	4 年	関 千洋
	4 年	田地野 凌生
敬愛学園高等学校	2 年	福島 健輔

(引率)

経済学部 専任講師	村上 翔一
アドミッションセンター	室員 古山 理恵子
地域連携センター	室長 藤森 孝幸

編集後記

敬愛大学も加盟している「大学間連携災害ボランティアネットワーク」のご縁で、今年 3 月、広島経済大学の学生たちが主催した講演会に参加する機会を得た。そこで出会ったのが、大川小学校でお嬢様を亡くされ、また女川第一中学校や矢本第二中学校(東松島市)で国語の教師をされていた、佐藤敏郎さんである。実は今回大川小学校での語り部を鈴木典行さんをお願いするにあたり、力を貸してくださったのも佐藤さんだった。

広島での講演会で、佐藤さんが締めくくりに話されたことが忘れられない。それは「防災とは」という問いかけだった。佐藤さんは言う、「防災とは『ただいま』を言うことです。」 想定外、予想すらしていなかった、そんな馬鹿な……。当たり前のように「ただいま」と言って帰ってくるはずの家族を災害で失うことは、どんなに辛いことだろう。災害は、そんな私たちの心の隙間に、無情に飛び込んでくる。だから朝、家を出るときには「いってきます」「いってらっしゃい」が欠かせないし、帰宅したら「ただいま」「おかえり」が言える日常を忘れないことが防災なのだ、と佐藤さんは講演を結んだ。

本学の地域連携センターでは、さまざまなボランティア活動についての相談を受けたり、紹介したりしている。いよいよ東京オリンピック・パラリンピックのボランティア募集も始まった。今後は災害対応についても、学生の皆さんが学べるような企画も考えていきたい。

今回の活動で参加者一人ひとりに、東日本大震災がなければ知り合うこともなかった東北の方々とできた「縁」。その貴重な縁が、いつまでも広がっていきますように。

(敬愛大学地域連携センター 室長 藤森孝幸)

敬愛大学 宮城ボランティア 2018 活動報告書

3つの「つ」~つたえる、つながる、つづける

平成 30 年 10 月 15 日 第1刷発行

発行者 藤森孝幸

発行所 敬愛大学地域連携センター

〒263-8588 千葉県千葉市稲毛区穴川 1-5-21

電話 043-251-6364(直) ファックス 043-284-2376(直)

印刷所 株式会社裕星グループ



3大学合同ボランティア学習会で、尚絅学院大学、西南学院大学と交換した各県のご当地キャラクターたち。
左からむすび丸(尚絅学院大学/宮城県)、ふうさん(西南学院大学/福岡県)、チーバくん(敬愛大学/千葉県)。